常識？は？なにそれ？？俺はそんなもの知らん！！

ＲＫ－ＲＥＤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
常識？は？なにそれ？？俺はそんなもの知らん！！

【Ｎコード】
Ｎ３８８４Ｓ

【作者名】
ＲＫ－ＲＥＤ

【あらすじ】
ある男が世界から消えた。そして現われたのは異世界。全てを破壊できるほどの能力をもらいその男はどこへ行き着くのか

見えるのに見えない者との会合（前書き）

これは作者の独断的偏見による小説ですので、原作が好き！！主人公は絶対〇〇！！という人はバックスペースキーを押すことお勧めします。

それでもいい！という方はどうぞご覧ください

見えるのに見えない者との会合

「は??　ここどこよ?」

目の前に広がるのはただただ広い空間

「ここは狭間だ」

「!?!?　だれだ!!」

「貴様の目の前におる」

「は?　いや手品とかいいから　さっさと出てきなさい」

「それは無理な話なのだよ・・・・・・・×××君」

「なんでだよ!!??」

「私はあってないものなのだから」

「あってないもの??」

「そう、そこにありながらないもの、見えるけどみえない、聞こえるが聞こえない、つまり虚ろな存在なのだよ」

「つまりはなんだ??」

「君は　馬鹿なのかい?」

「うるさいさっさとはけ！！」

「つまりは　虚無だ」

「虚無？？なんだそりゃ？」

「君たち人間から　神、悪魔、意思、ガイア、世界、起源、根源などと呼ばれるものなのだよ」

「ふ～ん　すごいんだな～」

「・・・・・信じるのかね？」

「だって、信じるしかないじゃん　見えないけど声聞こえるし　この空間どう見ても地球じゃないし」

「君は人間にしては思考がちがうな」

「そりゃどうも・・・・で、なんでここに俺がいるわけ？？」

「君が境界を越えてしまったのだよ」

「境界？？いつ？？どうやって？？」

「境界はその名のとこり境目のこと、そして君は越えたのだよ、その世界を」

「とりあえず境界はわかった、だがなぜ越えれた？」

「それは偶然だったのだよ、それこそ星が誕生できるかどうかの確率で」

「すげぇな俺」

「だが、君が境界を越えたことによって君は消えたのだよ世界から」

「・・・・・・つまりはしんだのか??」

「いや、まだ死んではいないだが、いずれ死ぬだろう」

「そうか・・・死か」

「君は死んでもいいのか?」

「それもいい、どうせここまま生きてても何もない」

「君は・・・・・・もう壊れているのだな」

「ああ　俺は壊れている、いや狂っているだからこそ死を選ぶ」

「ク・・・・フフフフフフフフ・・・・・・・・アハハハハハハハハ・・・・・・実にいい!!実に愉快、実に楽しい!!!!」

「いきなりどうした?気持ちの悪い奴だな」

「私は決めた!!君には別の世界に行ってもらおう」

「なぜそうなる?・・・今までの話をきいてたか??」

「だからこそ！！君には生きてもらおう！！これまでの制限や意味などなくただありのままに」

「お～い？　はなしを聞け！！」

「私は君が気に入った！！私は君に全てを与えよう！」

「もういい・・・・・・でなにをくれる？？どこに連れて行く？」

「やはり、君はいい！！一番初めになにをくれるか聞くとは！！実にいい！！」

「はぁ～？なに言ってんのどこに行くにしても装備が一番重要だろ」

「まぁいいだろう！君に行ってもらう世界はアニメの世界だ」

「アニメって何の？」

「ＩＳという世界だ」

「あ～あれか～で俺はどうすればいい？」

「どうすればとは？」

「ＩＳの世界にいって俺はどうする？何をすればいい？何をなせばいい？」

「君が好きなように生きればいい！！どうしようが君しだいだ！たとえ世界を破滅させてもかまわん」

「それは原作を破戒しまっくってもかまわないと？」

「そういうことだ」

「わかった。でわ次に何をくれるんだ？」

「なんでも、望んだものを」

「さすがは神と呼ばれる存在だな」

「フッ当然だろうに！！」

「でわ、　最初に俺にＩＳの代わりになるものをくれ！・・・そうだなＧガンダムのＭＦを人間サイズでＭＦはスパロボのネオ・グランゾン、待機状態はイヤリングだ、形状はマクロスＦのシェリルのイヤリングだ！」

「君・・・・・・オタクだったんだね・・・・・・・そして細かすぎる！！・・・・・・・まぁいいが」

「気にするな！！・・次に俺の組織だ」

「組織？？どうしてだい？？」

「なにをするにも組織は必要だなによりも一人では限界があるからな」

「本当に君は愉快だな・・・・いいだろう」

「じゃあ、組織名はギルティ、社会での立場は財閥で名前はヴァル

ハット財閥、規模は世界の三分の一を支配している、武装組織はジャッジメント、旗艦はガンダムＯＯのプトレマイオス２で」

「こちらも細かいな、まぁいいがこれでおわりか？」

「いやあとは能力をくれ」

「能力だと？いってみろ」

「連金術を等価なしで、イノベイターの能力、ギアスを各種制限＆暴走なしで、見稽古の能力を制限なしで、投影の能力を完全再現つきで、とある魔術と禁書目録と超電磁砲の能力全部とパンドラとリミッターの能力を聖痕体で９８％だな」

「やけに能力が多いのはなぜだ？」

「それは・・・・どうせ一つの世界にいって終わりなわけないだろ？」

「！？・・・・・・よくわかっているようだな、それならいいだろう」

「最後にその能力に見合った肉体をくれ」

「良いだろう、すべてを叶えよう」

「たすかる」

「たすかる・・・・か・・でわこれが本当に最後だ・・・顔はどうする？名前はどうする？」

「どうでもいい・・・・・あ、やっぱり人並みには見れる程度にはしてくれ」

「君はよくがあるのかないのか、よくわからないな」

「勝手にいってろ・・・・名前は・・・・そうだな、侑弥・ファルス・ヴァルハットで頼む」

「よかろう・・今ここに全ての願いはかなった行くがいい狂いし者よ!!」

「ああ、じゃあな!神さん!!」

そして、侑弥は光に消えた　残ったのは白い空間だけ

世界を壊す？いや変革？とりあえずなんかしよっ！！

「ん・・・・・・・着いたのか？」

あたりを見渡すが何もない、あるのはただ広がる荒野のみ

「は？？なにここ？どこ、ここ？・・・・・・・とりあえず能力確認だな、まずは連金術」

パチッ

「よし、できたな」

できたのは、寝袋・・・・・・生活が重要だからな！

「次は、ＩＳ・・・・・いやＭＦだな、ネオ・グランゾン起動！！」

「ＯＫ　マイマスター」

「しゃべった！？！？」

「なにを驚いていらしゃいますか？マスター？」

「いや、・・・・なんでしゃべれんの？」

「それは、私がＡＩ搭載方のＭＦだからです！！」

「あ・・・そう・・・・・もういいや・・・・・・あの神どんだけ過保護だよ？」

「でわ、これから私とこの世界の現状をお話します」

「お？了解　頼む」

「私はあなた専用の機体なのであなた以外には動かせません。そして私はここのＩＳで言うと第９世代に相当します」

「ちょっとまて！？第９世代？？なにそれ？？そんなの性能差ありすぎて捕まるわ！！」

「ご心配無く、あくまで第９世代はネオ・グランゾンだけです」

「ということは普段はどうなる？」

「普段、私を展開する場合は、グランゾンとして展開されます、最初からネオ・グランゾンでも良いのですが・・・・・」

「なるほど！で、グランゾンだと性能はどのくらいになるんだ？？」

「グランゾンですと第７世代相当です」

「アハハハハハ・・・・・・・・・もう笑うしかねぇーよ・・・・・世界破壊できるぞ俺一人で」

「マスターが望むのでしたら一日で滅ぼすことが可能です！！私はそれだけの性能があります！！」

「なぜ？ちょっと強気なんだ？・・・・・はぁ、まぁわかった」

「次に今の世界の現状です。今はちょうど織斑　一夏がＩＳ学園に入学する一年前くらいです」

「ふ～ん、どうでもいいやそんなんこと」

「？介入なさらないんですか？？」

「最初から介入しても面白くないし、原作しってるからつまらない・・・・・」

「でわ、どうするおつもりで？」

「ある程度したら介入してみるとするよ、それより会社とか組織はどうなっているの？？」

「組織ギルティの本拠地は木星に建設してあり、ならびに武装組織ジャッジメント、本拠地も木星にあります、旗艦プトレマイオス２は太平洋の深海２万メートルに待機させています。」

「組織と武装組織の人員はどうした？」

「マスターを頂点に全てＡＩ搭載型アンドロイドがやっており、全ＡＩがマスターに絶対の忠誠を誓っております」

「なるほどな、人間などＡＩの前では不要か・・・・・・・」

「いえ、そういうわけではありません、私達はＡＩですが心が芽生えていますそれにＡＩといってっもほとんど人間と変わりありません、子も生せますし、成長もできますから」

「なぜだ？」

「全ては、見えるのに見えないものからでございます」

「はぁ～～～・・・・・あいつどんだけなんだよ過保護って言うか、これはもう至れり尽くせりだな」

「そうでございます！それに人間はマスターが連れてこればいいでわありませんか？」

「誘拐しろと？」

「いえいえ、そうでは無くマスターに惹かれた者達を連れてこればいいだけです！」

「そういうものかね～というか俺になんか惹かれるかな～？・・・・・んっ・・そういえば財団のほうはどうなっているんだ？」

「はい、言われていたとおり世界の三分の一を支配してあります、あとはマスターのご指示しだいでございます」

「そういえばさ、俺の顔ってどんな顔なわけ？」

「どんな顔と申されますと？」

「いや、神さんには一応人並みの顔っていってあったんだけど・・・どう？？」

「ご自分でご確認されたほうがよろしいかと」

「え！？っそんなにひどいの！？！」

「鏡を転送します」

シュン

目の前に鏡が転送される

「でわ、いざ！！・・・・・・・・・・・・・・・って！！はい！？！？」

そして鏡に写ったのはグランゾン開発者・シュウ・シラカワを幼くした顔だった

「神さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう！！！！！」

「お気に召された、ご様子ですね」

「ああ、気に入ったよ、じゃ　ちょっとやってみますか」

こうして原作に突入していく

もう世界手に入ってないか？

「そういえば、財団はどこの国にあるんだ？？」

「もちろん日本です！！　それ以外ありえません！！」

「えっ！？・・・・・・・・までまてそれはまずいだろ！？
某世界最強国家がだまってないだろ？！？！」

「いえ、そこはこちらは世界経済を支配しているんですよ？
ちょっとそっちにいく流通品なくしてやろうか？って聞けばおわりましたよ」

「悪魔だ・・・・悪魔がいる」
ブルブル　ブルブル
「いいじゃないですか。これで自由に動けるんですから」

「そ、そうだな。まぁいい、じゃあ、財団にいきますか」

「はい！」

「あっ！！まってください、私はあなたをなんとお呼びすればいいでしょうか？」

「ん～～、普通に侑弥でいいよ」

「でわ、侑弥様と」

「かたいな～侑弥でいいよ侑弥で」

「いえ、侑弥様で決定しました」

「えっ、もうわかったよ」

キングクリムゾン！！時間が飛ぶ

「さて付いたな、・・・・・・・って、
これ前から堂々とはいってもおいだされるだけじゃないのか??」

「ご安心ください、受付はアンドロイドですのですぐにわかります。
それに財団の幹部に位置する人間は侑弥様の顔を知っていますので
大丈夫です」

「幹部は何人いるの?」

「人間でわ、15人ですが、たとえ全員が侑弥様の意見などにに反
対しても問題ありません」

「え??どゆうこと??」

「この財団はもともと侑弥様のための財団ですので、侑弥様の妨げ
になるものは一切なく、この財団は実質侑弥様の独裁政治的な財団
です」

「コワっ！！なにそれ俺コワっ！」

「ですので侑弥様が倒れたりすれば世界が終わります」

「えっ・・・・・・・・・・・・・・・えーーーーーーーーーーーーーーーーーー?!?!?!?!?!?!?」

「ですので、くれぐれもご無理をなさらぬようにお願いします」

「了解であります!!!」

「でわ、いきましょう」

そういって侑弥は入っていった

「なんかあっけなく、総帥室に通されたな」

「それは、侑弥様に財団ですし」

「そんなもんなのか?、まぁいいか、じゃ　幹部と呼ばれる奴を全員ここにあつめろ」

「??なぜですか?」

「今後の方針を伝えるからだ」

「わかりました」

さて、ちょっと世界をを変えようか♪

ｓｉｄｅ幹部

「いきなり幹部全員に召集とは・・・・・」

「まったく、私達はヴァルハット財閥の幹部なのだぞ！！それを誰とも知れぬ奴が呼ぶとは・・・・」

「よほどヴァルハットの脅威がわからぬらしいな・・・・・・」

「身の程をわきまえていない・・・・・」

「「皆様、お静かにお見えになりました」」

ｓｉｄｅ主人公

さて、そろそろ幹部たちが集まった頃合だな、しかしこの容姿ではいささか似合わないな

「侑弥様、準備が整いましたので起こし願います・・・・・どうかいたしましたか？」

「いや、この容姿ではいささか威厳が足りないとおもってな」

「そうですか？・・・・・・では、容姿はどうにもできないので仕方ないとして、雰囲気やしゃべり方を変えてみては？」

「なるほど！じゃ、どんな風にするとなると・・・・候補はルルー

シュかＭｒ．武士道かトレーズかどれにするか悩むな」

「あの・・侑弥様？」

「ん？　何？」

「なぜ、Ｍｒ．武士道が候補に？？」

「いや、俺的にあの人は戦いでの威厳があると思うんだよね、ルルーシュは明らかに指揮官として指導者としての威厳が、トレーズは指導者としての威厳が、つまりは片方だけのほうを取るか両方をとるかなんだよね」

「それでしたら、両方をとればいいのでは？？」

「いや、両方ってことは半分づつってことなんだよ、だからなやんでるんだ」

「でしたら、この場合は財団ですし、指導者としての威厳なのではありませんか？」

「それも考えたけど、あんまり威厳があるとＩＳ派の女性達に目をつけられるでしょ
逆の威厳でも同じ・・・・・・・・あれ？ということは一つしかないや」

「決まりましたね」

「ああ、私はルルーシュの真似をするとしようだがただまねするのではアニメどおりになる可能性があるから少しルルーシュより残虐

にそして冷酷にする」

「わかりました。こちらでもそのとおりにいたします」

「では、行くとしよう」

会議室前

「では、どうぞ」

幹部？はっ？逆らうなら・・・・・・・・

ガチャ

ｓｉｄｅ幹部

「子供！？」

「子供がわれわれを呼び出したというのか！？」

「子供の戯言によびだされたというのか！？」

「ふざけるな！！われわれを誰だと思っているんだ！！」

「皆さん、お静かに願います」

「秘書風情が！われわれに意見するな！！」

「お静かに願います！」

ｓｉｄｅ主人公

「さて、初めましてと言って置こうか」

「子供風情が我々に何のようだ？我々は子供の戯言などに付き合っている暇などない！」

「これでヴァルハットの幹部とは底が知れるな」
「な！？！？子供が！？！？」
「自己紹介して置こうか、私の名前はユウヤ・F・ヴァルハットだ」
「ヴァルハットだと！？！？！」
「その名前は総帥の！？！？」
「我々をバカにしているのか！！！」
「バカになどしておらんよ、私がヴァルハット財団総帥だ」
「ふざけるな！子供が総帥であるはずがない！！」
「そうだ！ありえない！！」
「では聞くが、君達は見たことがあるのかね？総帥を」
「グッ！？！？！・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
「ないのだろう、当たり前だ私が総帥だからな」
「そんなわけあるはずがない！！」
「まだ否定するというのか、意味のないことを」

「では、貴様が総帥であることを証明できるのか！！！！！」

「ふむ、では証明しよう」

「なに！？！？」

「ヴァルハットの職員は皆自分の身分を証明するために特殊なカードを持っている、お前達も知っているだろうが、このカードは本人以外の使用を防ぐためにさまざまなプロテクトをかけている、指紋・網膜・声紋・ＤＮＡ・輪郭・パスワードこれらが全て一致して初めて身分を証明できるカードとなるならば私がそのカードを使えれば問題ないな」

「な！？！機密ランクＡＡの情報を？！」

「つ、つかえるはずがない！！」

「さて、カードはこれだ、では」

カード音声「これより本人認証を行います、指紋認証開始しますカードに触れてください、スキャン開始

ピー

親指確認・人指し指確認・中指確認・薬指確認・小指確認　全指確認続きまして網膜認証開始します、カードを右・左の順に目に当ててください

スキャン開始　ピー

右眼網膜確認、左眼網膜確認　全眼確認続きまして声紋認証を開始します、カードに向い登録時の音声パスワードを発音してください、認証開始

ピー

「ユウヤ・ファルス・ヴァルハットとの名において愚者に鉄槌と惨劇を」

声紋確認　ＤＮＡ確認は指紋確認時に皮膚を確認いたしました輪郭も網膜確認時にわかりましたので最後のパスワードをご入力ください。

カタカタカタカタ・・・・・・・・・・・・・

確認いたしました。指紋・網膜・声紋・ＤＮＡ・輪郭・パスワード総確認・・・・・・・終了

ヴァルハット財団総帥ユウヤ・Ｆ・ヴァルハット本人と確認」

「さて、諸君、これで私が総帥本人と確認されたわけだが、まだ否定するかね？」

「「「申し訳ありませんでした」」」

方針そして始動

「さて、諸君言い訳はあるかな？」

「大変、申し訳ありませんでした」

「どっどうか寛大なご処分を！」

「今後このようなことがないように致します」

「・・・・・いいだろう、今回は不問をする、だがな、次はない」

「「了解いたしました」」

「さて、では財閥の方針だが、まず君達にやってもらいたいことがある」

「なっなんでしょうか？」

「ＩＳ学園の実権を裏から手に入れろ」

「なっそのようなことできるはず・・・・・・」

「確かに、できるはずがない・・・表側では・・・・・な」

「そのようなこと裏でもできるなずが・・・・・」

「方法なぞある、ＩＳ学園で使っている備品、施設、人、食物、全てを我が財閥の傘下の企業が受け持っている・・・・・それを掌握

しろ」

「でっですがそれでは各国からの講義が！」

「そのようなもの、こちらで何とかできる。これが最後だ、やれ」

「！？了解いたしました・・・・・」

「あぁ、それと、ＩＳ学園の教師、名前は織斑千冬、山田真耶の両名ならびに織斑千冬の弟、織斑一夏、そして篠ノ之束の妹である篠ノ之箒に対する隠密行動ならびに接触を禁ずる」

「なぜですか？実権を手に入れたのなら直ちに掌握すべきでは？」

「現時点での篠ノ之束の行動予測が読めない、ならびにこの４名いや篠ノ之束をあわせれば５名か、がヴァルハットが学園の実権をにぎったのを知ったときにとる行動予測がこちらに不利になる可能性があるからだ」

「確かに、了解しました」

方針そして始動（後書き）

この駄作を読んでくださっている方、はじめまして作者？です

さて、この会話だけの文ですが、次回？から、やっと本編？に入っていきます

ここで一つアンケートなのですが

このままセカイ掌握で良くか？ソレスタルなんたら的行動をとるかどちらが良いかアンケートをとりたいと思います　感想に送ってください

あ、もちろん感想でもいいのでおねがいします（改善的なのは良いですが非難はＮＧ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3884s/

常識？は？なにそれ？？俺はそんなもの知らん！！

2011年10月1日00時42分発行